

New Campus(9)

東京工業大学・理学部・地球惑星科学科

井田 茂¹

1. 地球惑星科学科研究発表会

1994年、まだ松もとれぬ1月6、7日に東工大・地球惑星科学科の各研究室の近年の研究成果及び研究計画を発表する"地球惑星科学科研究発表会—現状と将来像—"と題する会議が開かれました。

この約1年の間に(筆者を含めて)8名の新しい教官が着任し、学科のスタッフは倍増しました。まだ、助手を中心として未着任ポストがたくさんありますが、とりあえず学科の大枠ができたという感じで、この地球惑星科学科研究発表会は学科の実質的スタートを飾るものになりました。

プログラムは以下のようなものでした。

■1月6日(木) 外部評価委員：上田誠也、久城育夫、熊沢峰夫、水谷仁

9:45～10:00 Opening Remarks

学科長(中澤 清)

10:00～11:00 マグマ製造工場の研究成果より

高橋栄一

11:00～11:40 火山学への物質科学的アプローチ

中村美千彦

11:40～12:40 計算鉱物学の方法と可能性

河村雄行

13:40～15:10 地磁気ダイナモの数値計算

本蔵義守・松島政貴

15:10～16:10 トモグラフィの基礎理論

斉藤正徳

16:10～16:50 学際研究としての古地磁気学

田中秀文

16:50～17:20 評価委員によるコメント

■1月7日(金) 外部評価委員：熊沢峰夫、水谷仁

10:00～11:30 惑星形成論とその周辺

中澤 清・井田 茂

11:30～12:30 磁気圏物理学の課題

長井嗣信

13:30～14:30 付加体地質学その後

磯崎行雄

14:30～15:30 地球史解説

丸山茂徳・平田岳史

15:30～16:00 評価委員によるコメント

16:00～17:30 総合討論

(*)谷本俊郎氏(グローバル地震学)はこのあと1/15に着任

学科たちあげの勢いもあって、発表会のサーキユラーの段階から、

「……学科として高いレベルを維持して行くためには、構成スタッフの間の風通しをよくし、相互批判をとおして、的確な自己評価をしていくことが必要だと思われます。また、せっかくこの地球惑星科学科にユニークな人材が集まったのですから、各人は独立の研究をしつつも、他の研究者と有機的に結合する部分を持って、お互いの才能を利用しあえば、得するところも大きいと思います。さらに、このようなことをとおして、ここの地球惑星科学科全体としての方向性のようなものを打ち出し、それによって、日本、世界の地球惑星科学という学問分野をリードしていくべきだと思います……」

¹東京工業大学理学部地球惑星科学科

と気合いがはいつていましたが、本番でも（心配になるくらい）気合いがはいい非常に盛り上がった会になりました。特に日頃クールな中澤学科長（当時）が、打ち上げの懇親会では興奮を抑えきれないという様子だったのが、印象的でした。

地球惑星科学科研究発表会はこれから毎年開かれる予定です。また他機関と相互乗り入れでこのような会を開くことも検討しています。

2. 個性派集団

ここの学科のスタッフには個性的な人が多く、教官会議でも笑いが絶えず、退屈しません（ちゃんと議論すべきことは議論しています……念のため）。

例を当学科の公式新生向けパンフレットから抜粋して最後に付録としてつけてありますので参照して下さい。

このようなスタッフを取り仕切る秘書の工藤恵さん、原（磯崎）亜紀子さんはさぞかしたいへんだろうと思われます。

なお、各スタッフの研究内容ですが、型にはまらない人が多く、〇〇学と書くのが難しいので、先の研究発表会のプログラムからその一端を想像して下さい。

また、他の人の話にお互い首をつっこむこともよくやっていて、なかなか刺激的です。そういう中から学際的な研究が生まれそうな気配もあります。

3. 新しい試み

とにかく学科はできたばかり、スタッフは着任したてが過半数ということで、次々と新しい試みが打ち出されていっています。

外部評価委員をいれた研究発表会もその一つですが、他にも、たとえば、この2月には地球惑星

科学科学部生を対象とする地惑巡検（ちゃんと単位になる正規の授業）がカルフォルニアで行われました。地惑巡検はこれからも基本的に海外となる予定で、来年はハワイとの噂もあります。

また、サバティカル制度も正式に発足しました。これは何年かに一度、授業担当、各種委員の担当が全くなくなり、外国などにいったりして、研究に専念できるというもので、欧米の大学ではよくある制度ですが、日本では珍しいのではないのでしょうか？

これまでの授業担当、各種委員担当をポイント化し、教授、助教授、助手の各階層の中でポイントが高いものから、サバティカルをとれるということになっているので、早くも各人のポイントが話題となっています。某M教授のように、ポイントの売買はできるか？ と教官会議で真顔で質問するものも現れています。

他にもまだまだ、あっと驚く新企画が控えているので、乞うご期待ください。

こう書いていると、いいことばかりのようですが、当然、はじめはいいに決まっています。問題は、いかにしてこのアクティビティを維持していくか？ いかにしてマンネリに陥らないようにするか？ 後継者をどのように育てていくか？ ということでしょう。

4. 大学院

大学院は、他大学卒、他大学大学院修了の人にも広く門戸を開いています。今年はまだ応用物理学専攻の地惑コースを受験するというルートになるのではないかと思います。応用物理学専攻ということですが、物理とは縁の無い物質系の人にも門戸を開いています。

来年は地球惑星科学科の一期生が4年生となるので、地球惑星科学専攻の大学院が正式に設置さ

れる予定です。新しい学科のたちあげに、自分も参加しようという意気のある、学生の皆さん、博士課程編入を目指す修士の皆さん、歓迎します。

5. 付録：スタッフの紹介 (新入生向けパンフレットから抜粋)



齋藤 正徳
(教授)

非常に優しい先生ということである。旺文社の傾向と対策の物理の解説者として受験生のハートをガッチリつかんで離さない。若いころはかなりのスポーツマンで、体操でインターハイに出場された経験をもつ。学生の噂では、日本酒にこだわる人、ビールはサッポロ派。シブい先生、まさに学者って感じの先生。夜の大井町線ホームでダンディに煙草を吸っているのが齋藤先生である。



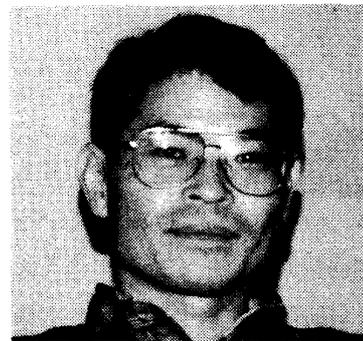
中澤 清
(教授)

実は、ピアノがうまいらしい。でも、いまだかつて、先生のピアノを聞いた人はいない。その昔、助手時代には月曜日に大学をさぼってテニススクールに没頭したという噂あり。テニススクールでは、「ご職業は何ですか？」と聞かれると「理容業」と言い張っていたらしい。ちなみに、大井町線の中で、難しそう顔をして、事務書類に赤ペンを入れて校正している、がっちりした体形の人を見かけたら、それはきっと中澤先生。



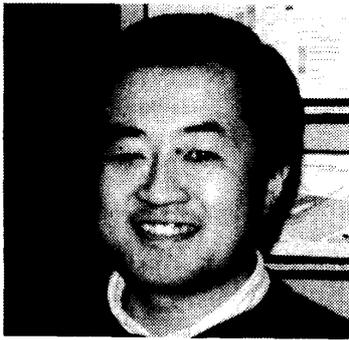
本蔵 義守
(教授)

「四番、ピッチャー本蔵」スターティングメンバーを告げるアナウンスの声にスタンドの観客から「本蔵先生ー」と黄色い声。広島ファンのプライドにかけても、試合で負けたくない。そのために走り込みもした。5キロを超えるジョギング。もっとも伊豆、雲仙、トルコ共和国まで飛び回って地球磁場観測をするので、そのための体力作りとの噂も。試合中は「勝っても負けても、運動後のビールはうまいから、今夜は大判はたいいて、学生達と楽しくのむか。」実にお優しい。



丸山 茂徳
(教授)

人生＝サイエンスという感じで、ありとあらゆるエネルギーを研究に投じている。同業者からは、まるで火を吹く化け物のように恐れられている。けれども本当は心優しい先生で、何時間でも、そう自分の睡眠時間を削ってまでも、それこそいやになるまで議論してくれる。まさにサイエンスの超人。実はサイエンス以外ではまるで無頓着。学生が落書きしたジャンパーを着て地下鉄に乗っていたとか、学会でM先生とどちらが汚いかを競い合ったとか。



磯崎 行雄

(助教授)

新婚はやはや。頭の回転も速いが、手も速い。でも、本人曰く、「俺は捕まった方だよ」。

かみさんとのデートは、大岡山商店街。そんなに、くつつかなくてもいいじゃない。

磯崎先生は、ルーペでみてやっとな分かる程の小さな化石を使って「日本列島がどうしてできたか」を研究してきた。日本が世界に誇れる数少ない地質学者である。

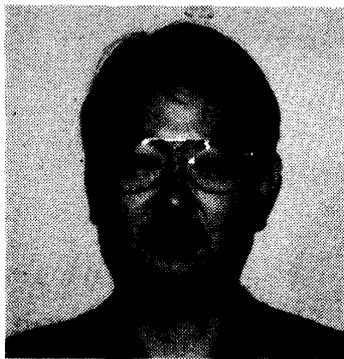


平田 岳史

(助手)

化学分析の鬼という評判。岩石中に含まれる1兆分の1グラムという僅かな重さの物質も

決して見逃すことはない。昨年東工大に赴任してきたと思ったら、あっという間にイギリスへ武者修業に行ってしまった。また今年の初めに一時帰国したものの、左の不可解な写真一枚を残し、再びイギリスへ修業の旅に出た。謎多い幽霊教官(?)。



高橋 栄一

(教授)

少し太めでメガネ顔ながら、バリバリの実験家でもタフな人。その上、学生よりも

アグレッシブである。時には、電源の入っていない工作用具を一生懸命動かそうとしたり、きちんとセットされていない装置で実験しようとして学生に冷やかされることもある。先生の手は熱に強く100度のピーカーを平気で持ち運ぶことができる。それを自慢して「実験屋だったらこれぐらいあたりまえですよ」とうそぶくことも。